

「ニーチェ書誌」に関する覚書

— 移入史考察の試論として —

高松敏男

日本におけるニーチェの移入史は、追究すればするほどその根は深く、範囲は広い。早い話が明治期のかたニーチェが始めて移入されて以来、時代思潮の上大きく登場する時期だけに限ってその存在を眺めてみても、四度に昇ることは誰の目にも明らかかなことだろう。すなわち、第一回目はわが国の初期ニーチェの移入としてしばしば文学史上で問題となる、高山樗牛、登張竹風、坪内逍遙等が中心となつてしきりに論争①を巻き起した時期。次いで第二回目は、和辻哲郎の『ニーチェ研究』②の登場を契機として、生田長江、中沢臨川、金子馬治、阿倍能成、阿部次郎……等の紹介、翻訳の類が続出する時期。さらに第三期は、所謂「不安の哲学」の流行が端緒となつて三たびニーチェの復活が唱えられてから、ニーチェがドイツ流にファシズム化されていく時期。そして最後は、今回の敗戦後に見られたニヒリズム、実存主義の流行にともなう新たなニーチェの受容期。しかもその期間には、これら顕著なニーチェ流行

の背後に隠れた無数の地道な研究文献、歴大な数に昇る雑誌論稿の類、ならびにニーチェ自身の著作の訳書があとを断たずに続出してゐる。のみならず初期ニーチェの移入の問題を顧みても、桑木敏翼の説③によると、それはさらに明治二十八、九年の帝国大学でのケール博士の講義にまで溯るといふ。

が一方、これほどの歴史と影響力をわが国で持ちながらも、ことニーチェの移入史についての考察となると、これまで意外とまとまつた資料が見当たらない。わずかに小野俊郎の「我が国に於けるニーチェ研究」（昭和11年5月『経済往来』十一巻五号）や、戦後では浅井真男の「ニーチェ解釈の歴史」（昭和26年9月『綜合世界文芸』三輯、のち水上英広編『ニーチェ研究』所収）、長谷川泉の「ニーチェと日本文学」（昭和36年6月『国文学』六巻七号、のち『方法と様式』所収）、信太正三の「実存思想の輸入と研究——明治から戦後まで」（昭和37年10月『実存主義』二六号、のち『実存主義講座 I』所収）、船山信一の『大正哲学史研究』④（八学術選書Ⅴ 昭和40年11月・法律文化社刊）、杉田弘子の「ニーチェ解釈の資

料的研究——移入期における日本文献と外国文献との関係（昭和41年5月『国語と国文学』四三巻五号）などが見当る程度で、このうちすでに忘れられている小野俊郎の論稿をのぞけば、いずれもニーチェ自体に則した全面的・具体的な移入史の考察とはいいがたい。長谷川泉氏のものは、『美的生活論争』前後の時期に於けるニーチェと日本文学との関係を問題とした点に於て詳細であり、また杉田弘子氏の論稿は、T・チーグラーと樗牛といったように、当時の外国文献の樗牛、竹風、天溪、逍遙等に与えた影響を比較検討しただけにとどまっている。さらに浅井真勇氏や信太正三氏、船山信一氏などの論稿となると、巨視的ではあるが、ニーチェ解釈史の一端としての日本のニーチェ移入史への一瞥、もしくは実存思想全般にわたる輸入史の先駆としてのニーチェ移入の輪廓、ならびに「大正期における生命哲学の理解」の一部としての当時の和辻哲郎や阿部次郎のニーチェ理解……等に焦点が向けられている程度のものである。

しかもさらに言葉を費やせば、わが国のニーチェ移入史に関する考察をなした資料の中では、时期的に一番早く登場し、最も実証性に富んでいる小野俊郎の「我が国に於けるニーチェ研究」にしても、その内容は日本の文献に関する限り、全面的に昭和五年五月に新潮社より刊行された、D・アレキイ著『ニーチェ伝』の巻末、生田長江・野上巖編⑥「日本に於けるニーチェ文献年表」に依存しているといったありさまである。それゆえ現段階において、わが国のニーチェ移入史の全貌を可能な限り正確に辿ろうとすれば、必然的にこれまで存在する「ニーチェ書誌」の類を基礎として、全く新たに進めねばならない事情のもとにあると断言するのは正しいだろう。

以下は、そのための試論である。ここでは論点を絞って、わが国

のニーチェ移入史考察のための基礎的資料となる「ニーチェ書誌」（研究書目・文献目録をも含む）の類には、現在までにどのようなものが存在し、どの程度の文献が収録されているか、またそれらは個々にどの程度まで信頼でき得るか、という評価を廻って具体的に論を進めていこうと思う。

二

まず最初に問題となるのは、これまでに存在する「ニーチェ書誌」類の種類についてであるが、過去の文献を調査してみると、その数は予想外に多いのに気がつく。ここでは収録範囲や、内容の評価等の立ちいたったことは一応さて置くとして、現在までに見当るものを年代順に列記してみると、次のとおりである。

日本に於けるニーチェ文献年表

生田長江・野上巖編（昭和5年5月・新潮社刊）D・アレキイ著『ニーチェ伝』のうち。

ニーチェ文献（出版時評）

篠井英夫（昭和10年5月『経済往来』一〇巻五号）。

ニーチェに関する邦語の文献

丸田潤二郎（昭和11年2月『書物展望』六巻二号）。

日本に於けるニーチェ文献年表

野上巖編（昭和17年8月・改造社刊）D・アレキイ著『ニーチェ伝』（下）△改造文庫Vのうち。

日本におけるニーチェ文献

原田義人編（昭和27年8月・社会思想研究会出版部刊）水上英広

編『ニーチェ研究』のうち。

ニーチェの著作 参考文献

藤田美実編(昭和27年10月・朝書房刊)『フリードリッヒ・ニー

チェ——その人間と思想』のうち。

文献解題 Ⅱ、ニーチェ

原佑編⑥(昭和33年1月・有斐閣刊)『講座現代の哲学Ⅰ 実存

主義』のうち。

研究書目・参考文献△ニーチェ▽

国松孝二編⑦(昭和35年2月・筑摩書房刊)『世界文学大系月報

28』のうち。

ニーチェ文献(日本)

信太正三編(昭和37年7月『実存主義』二五号)。

実存主義の回顧と展望 文献 二、ニーチェ

上妻精編(昭和37年10月『実存主義』二六号)。

ニーチェ文献 二、日本

上妻精編(昭和38年5月・理想社刊)『ニーチェ全集別巻』のう

ち。

ニーチェ研究のための文献

信太正三編(昭和39年5月・牧書店刊)『世界思想家全書 ニー

チェ』のうち。

文献案内

手塚富雄編⑧(昭和41年2月・中央公論社刊)『世界の名著46

ニーチェ』の『附録1』のうち。

ニーチェ研究の文献目録と解題(邦文単行書篇)

高松敏男(昭和42年3月『大阪府立図書館紀要』三号)。

日本におけるニーチェ移入史

高松敏男(昭和44年4月『大阪文学』復刊十二号)⑨

ニーチェに関する新聞・雑誌文献と翻訳書目

高松敏男(昭和45年3月『大阪府立図書館紀要』六号)。

こうして並べてみると、点数だけに限って言えば、かなりの量にのぼる「書誌」ならびにこれに類するものが出揃っているということになるだろう。もつとも、われわれとしては最初に記したごとく、明治以来の激動に充ちたニーチェの移入史の存在を知っているだけに、昭和二十年以前のものがたったの四点しかなく、しかもそのうちの二点までが同一編者^⑩ による作成であるから、その点には些かもの足りなさを覚えないでもないが、それでも戦後昭和二十七年頃から、つまりわれわれの生活が一応の安定を取り戻し、ニーチェ自身の著作の版權が消滅する前後から、にわかに「ニーチェ文献」に対する関心も高まって来ていることは、資料が歴然と物語ることになるだろう。だとすると一方、論を戻して、われわれの最初の目的である、これらの「書誌」類に於ける内容に立ちいたって評価の方はどうだろうか。「書誌」類の点数に比例して、移入史考察のための基礎的資料とするに足りるだけの内容面での充実が見られるだろうか。あるいは信頼するに足りるだけの文献の収録と、書誌的な正確さが期待できるだろうか。

結論から先に言うと、この場合、筆者自身が最近になって新しく手掛け始めたものは一応除外するとして、従来刊行されているものは、収録範囲、書誌的正確さから見ても、案外、不完全で片手落ちなものばかりが出揃っている。われわれが丹念に、地道に、過去の埋れ

た資料の世界に身を沈めて、当時の文献の発掘と現本の確認をなす努力を怠る限り、意外な伏兵がその内に潜んでいる。以下はその確認のために、この問題を中心に「書誌」類に就いて具体的に一つ一つ検討を加えたものである。日本におけるニーチェの移入史について書かれた新たな論稿が、今後さらに一つの誤解史の積み重ねとして終わらせないためにも、こうした基礎的な作業をなすことが要求されてあるだろう。

三

日本に於けるニーチェ文献年表

生田長江・野上巖編（昭和5年5月）

△内容▽本「年表」は、日本における「ニーチェ書誌」としては、一番最初に出たもの。収録範囲は、明治の最初から、本「年表」掲載の『ニーチェ伝』刊行当時までのもの、(a)作品類 十五点、

(b)紹介研究類 十五点、(c)雑誌論文類 十六点。

△覚書▽本「年表」は時期的には一番早く、内容も総合的であるため、昭和五年以前の古い時代の文献を知るためには重要なもの。特に雑誌文献の収録は、同編者の手になる昭和十七年の「日本に於けるニーチェ文献年表」にもないため、古い文献を知る上では、戦前では本「年表」が唯一のもの。それだけにニーチェ書誌の中では労作と評価されているが、反面、本「年表」全般にわたる誤謬、その他不確かさが、のちの現本調査の不完全なニーチェに関する「書誌」類全般にわたって、そのまま決定的な爪跡を残すという結果にもなっている。例をあげれば、G・ブランドス著『超人の哲学』⑩の発行所「近田書店」は、「天弦堂」の誤り、

金子馬治訳『悲劇の發生、善悪の彼岸』⑫は、『悲劇の出生、善悪の彼岸』の誤り、高山林次郎「文明批評家としての文学者——本邦文壇の側面観」⑬の副題は、「本邦文壇の側面評」の誤り、阿部次郎「ニーチェのツアラツストラ解釈並びに批評」⑭の掲載年月「大正七年一月」は「大正七年一月〜大正八年一月」の誤り、といった具合である。しかし、いまここでは、一応こうしたことはさて置くとしても、本「年表」には次の点で問題がある。

(一) 文献の収録範囲に統一した規程が欠ける。例。中沢臨川著『嵐の前』⑮（大正10年1月・改造社刊）が収録されているのに、同著者の『破壊と建設』⑯（大正3年11月・新潮社刊）や、湊謙治著『キリスト？ ニーチェ？』⑰（大正5年12月・警醒社刊）などが洩れている。

(二) 「雑誌論文類」にいたっては、未収録のもの点数の方が多。例。この点についてはのちに具体例をあげる予定であるが、とりあえず筆者の調査では明治時代だけで五十点を越える新聞・雑誌論稿が見当るのに対し、本「年表」ではわずかに五点というお粗末さであることを指摘するとどめたい。大正時代においても同様。

(三) 叢書名の記入が統一されておらず、全般に洩れているものが多い。例。「紹介研究類」だけに限ってみても、桑木巖翼解説『ニーチェ倫理一斑』からは、「続倫理学書解説」、和辻哲郎著『ニーチェ研究』からは、「近代学芸叢書第二編」⑱、G・ブランドス著『ニーチェ超人の哲学』からは、「近代思潮叢書第一編」、の文字がそれぞれ洩れている。

(四) 書名等が現本の表記に正確でない。例。「山口小太郎訳」ツアラトストラ如是説」となっているのは、現本表記では「山口小太郎講述」^{対訳}ツアラトストラ如是説 第一編」¹⁹。久津見蕨村著「ニイチエ」は、正確には「ニイチエ」²⁰。

(五) 単行本の一部に所収のものは、ほとんど収録されていない。例。明治時代で主なものをあげると、登張竹風著「気焰録」²¹ (明治35年7月・金港堂刊)、坪内雄藏著「通俗倫理談」²² (明治36年2月・富山房刊)、長谷川天溪著「文芸観」²³ (明治38年8月・文明堂刊)、片山孤村著「^{最近}独逸文学の研究」²⁴ (明治41年12月・博文館刊)、田中王堂著「書齋より街頭に」²⁵ (明治44年5月・広文堂書店刊)。大正時代では、久津見蕨村著「現代八面鋒」²⁶ (大正元年12月・丙午出版社刊)、A・リール著、安井辰循訳「現代哲学講話」²⁷ (大正2年11月・北文館刊)、倫理研究会編「現代倫理思潮第三輯」²⁸ (大正4年11月・弘道館刊)、鹿子木員信著「文明と哲学的精神」²⁹ (大正4年12月・慶応義塾出版部刊)、L・ベルク著、高橋禎二訳「近代文学に現れたる超人」³⁰ (大正9年9月・国文堂書店刊)、阿部次郎著「^{第一輯}文芸批論 地獄の征服」³¹ (大正11年10月・岩波書店刊)、江原小弥太・中西伊之助共著「人生論十二講」³² (大正14年1月・越山堂刊) など、この中にはかなり重要な文献が見当るが、いずれも未収録。

ニイチエ文献 (出版時評)

篠井英夫 (昭和10年5月)

△内容▽副題に「出版時評」とあるごとく、書誌ではないが、外国のものの動向を展望しつつ、日本の文献の紹介をなしている。邦語文献の紹介としては、大正以後、昭和十年初旬までのもの、

単行書研究文献、十点。単行書伝記、二点。著作の訳書、六点。

△覚書▽文中に、「ニイチエ研究書の単行本は筆者寡聞にして余り多く知らない」とあるごとく、限られた期間の主要な単行本文献を紹介した程度にとどまる。出版事項についても、書名、著者名、版年が記されているだけで、お粗末なもの。収録の文献の内容を見てみても、昭和五年以前のもので先に紹介の生田長江・野上巖編「日本に於けるニイチエ文献年表」に見当らないのは、わずかに桑木巖翼著「五大哲学者」(大正3年3月・金尾文淵堂刊)のみ。ただしそれ以後、昭和九年頃までのものは「時評」であることからかなり詳しく、次の文献の紹介がある。³³「訳書」では、阿部六郎訳「物質と悲劇(フリードリヒ・ニイチエ——希臘族の悲劇的時代における哲学)」(昭和9年1月・芝書店刊)。「研究文献」では、藺田香勲著「ニイチエと仏教」(昭和7年5月・顕真学苑出版部刊)。L・シエストフ著、河上徹太郎・阿部六郎共訳「悲劇の哲学」(昭和9年1月・芝書店刊)。H・ドラン著、淀野隆三・高沖陽三共訳「ニイチエとジイド」(昭和9年12月・建設社刊)。

ニイチエに関する邦語の文献

丸田潤二郎 (昭和11年2月)

△内容▽本稿は邦語の「ニイチエ文献」についての筆者の随想。

△覚書▽「書誌」としては問題外。本稿を加えたのは、一応、生田長江訳の「ニイチエ全集」や、生田長江・野上巖編の「日本に於けるニイチエ文献年表」についての所感が述べられていることと、題名に誤解があつてはならないという意図からである。「書物展望」には他にも、昭和十二年七月号に、山内貞三郎「ニーチ

エに関する重要文献——ニーチェ哲学への二三の入門書並にニーチェ研究の時代相^{③4}なる論稿があるが、これは完全に外国文献を問題としたもの。

日本に於けるニーチェ文献年表

野上巖編(昭和17年8月)

△内容▽本「年表」は、先に生田長江と共編で刊行の「日本に於けるニーチェ文献年表」に一部補遺すると共に、その後、本「年表」掲載の「ニーチェ伝(下)」^{③5}刊行当時まで約十二年間の分、(a)作品類 十九点、(b)紹介研究類 二十四点、をいずれも増補したもの。したがって「著作の訳書」においても、「単行書研究文献」の分野においても、戦前のもものでは最も収録点数の多いもの。但し、「雑誌論文類」は本「年表」では全面的に省略されている。

△覚書▽昭和五年以後約十二年間のものが大巾に増補されているが、以前の分については、わずかに田中王堂著『最高芸術の大星小星』(大正9年10月・天佑社刊)が補遺されている程度で、間違い等も補訂されていない。したがって本「年表」においても、先に生田長江・野上巖編「日本に於けるニーチェ文献年表」の部分で指摘した問題点が、そのまま全面的に残されている。さらに新しく増補された部分に目を向けてみると、ここでも若干の間違ひなり、問題点が探しだせる。まず間違いを列記すると、生田長江訳「ニーチェ全集」^{③6}の「決定普及版」は「新訳決定版」が正しい。山元一郎訳の「ニーチェ詩集」「識られざる神」と記されているものは、「ニーチェ 識られざる神に」が正確だろう。また問題点としては、この部分においても依然、単行書の一部に収録

のもので重要な意味の持つ文献が全面的に未収録であることが指摘し得る外に、次の点があげられる。

(一) 収録洩れのが見当る。「作品類」では、青木巖訳「ギリシヤ悲劇時代の哲学」△富山房百科文庫第四十九▽(昭和13年11月・富山房刊)。永瀬平一訳「善悪の彼岸」△現代思想全書2▽(昭和14年3月・三笠書房刊)。「紹介研究類」では、伊福吉部隆著「ニーチェ愛と知慧の書」^{③7}(昭和11年11月・教材社刊)。(二) 発行月の記されているものと、いないものがある。

日本におけるニーチェ文献

原田義人編(昭和27年8月)

△内容▽本「文献」は、戦後一番最初に出た総合的なものであるだけに、以後、戦後の「書誌」類全般に大きな影響を与えているもの。しかし収録の内容は、巻頭に「野上巖氏のアレ、ギイ」ニーチェ伝(新潮社・昭和五年)と、同書の改訳「ニーチェ伝」下巻(改造文庫・昭和一七年)との巻末には、同氏の御苦心による文献目録が収められている。それらを手入することは容易でないとと思われるので、同氏の御許可を得てここにほとんど転載させて頂いた」とあるごとく、昭和二十年以前のもものは、「作品翻訳」二点、「紹介・研究」四点を除き、いずれも野上巖編のものからの転載にすぎない。したがって編者自身の手になるものは、正確には昭和二十年までのもの合わせて六点と、「戦後文献」として、「作品翻訳」六点(うち「全集」二点、「選集」二点)、「単行書文献」十八点、「雑誌等掲載文献」三十八点、のみに限られている。

△覚書▽本「文献」は、戦後一応ニーチェの評価が安定した時期

において、当時の時点で文献の総合的な収録を旨としたもので、わが国のニーチェ解釈の水準を示すと銘うたれた、水上英広編『ニーチェ研究』の巻末に掲載されたものであるだけに、人々のニーチェ文献に対する関心を高めるのには役立つと思えるが、反面、本書全体の水準の割には、「文献」自体の収録内容はお粗末である。まず昭和二十年までのものに限っていえば、収録内容がほとんどそのまま野上巖編のものからの転載であるために、先に両「年表」のところで指摘した間違い、問題点からまぬがれ得ないのは当然だとしても（ここでは再度繰り返さない）、その同じ範囲内において、さらに本「文献」の編者自身が重ねて誤りをおかしているのが見当る。例をあげれば、「紹介・研究」では、E・F・ニーチェ著『若きニーチェ』^{⑧⑧}、『孤独なニーチェ』^{⑧⑨}の両発行所が「新太陽社」となっているのは、「モダン日本社」^{④⑩}。『ニーチェ 人生哲学』^{④⑪}の著者が「伊福部吉隆」となっているのは、正確には「伊福吉部隆」。陶山務著『ツアラトウス トラ読本』^{④⑫}の発行月、「昭和十二年一月」は「昭和十二年十月」。また「作品翻訳」では、『ニーチェ詩集』^{④⑬}の発行月、「昭和十六年一月」は「昭和十六年二月」。さらに編者自身が増補した昭和二十年までの分、六点についていえば、A・ボイムレル著、「亀尾英四郎『ニーチェ』」^{④⑭}（哲学者と政治家としてのニーチェ）「となつてゐるものは、正確には「亀尾英四郎訳『ニーチェ』——その哲学観と政治観」」。また「森偶郎訳『ニーチェ書簡集』（ボイムレル編）」^{④⑮}となつてゐるものは、正しくは森偶郎、小口優、中野正夫、山崎八郎の共訳であるから、「森偶郎等訳」とでもすべきだろう。なおつけ加えれば、本「文献」では

「ニーチェ」がすべて「ニーチェ」に統一されたり、叢書名が一切省略されていたりするので、書誌的には書名表記その他の点でいよいよ正確さに欠ける。続いて編者自身の作成になる「戦後文献」の方に移るなら、次のような問題点が指摘できる。

(一) 「作品翻訳」として、「単行書」二点、「全集」二点、「選集」二点、の収録があるが、「単行書」にのみ限っていえば、同訳者のものでも、発行所、版型の異なる改訂版は収録の必要があるのではないか。また「全集」「選集」に限っていえば、未完結のものには最低限「未完結」を明記して置く必要があるだろう。

例。創元社版『ニーチェ選集』^{④⑯}。また続刊中のものについても同様。例。創元社版『ニーチェ全集』^{④⑰}。角川文庫版『ニーチェ全集』^{④⑱}。

(二) 「紹介・研究」では、編者の意図を尊重して、昭和二十七年初旬までのものに限つてみても、なお次のものが未収録。今井仙一著『ニーチェとソクラテス』（昭和22年12月・富書店刊）。土井虎賀寿著『ニーチェの精神伝統』（昭和24年1月・新月社刊）。

都筑博著『ニーチェ論ノート』（昭和24年3月・比叡書房刊）。K・ヤスペルス著、橋本文夫訳『ニーチェとキリスト教』（昭和26年6月・桜井書店刊）。秋山英夫著『ニヒルと神——キェルケゴールとニーチェ』（昭和26年7月・社会思想研究会刊）。

(三) 収録の範囲にやはり統一した基準が欠ける。例をあげれば、土井虎賀寿著『抒情詩の厭世——ゲテからニーチェへ』^{④⑲}（昭和22年5月・創元社刊）や、高坂正顕著『キェルケゴールからサルトルまで——実存哲学研究』^{⑤⑰}（昭和24年4月・弘文堂刊）などの収録がなされているのに対して、西谷啓治著『ニヒリズム』

⑤ (昭和24年11月・弘文堂刊)、高坂正顕著『続実存哲学』⑤ (昭和23年3月・弘文堂刊)、K・レ・ギット著『ヨーロッパのニヒリズム』⑤ (昭和23年11月・筑摩書房刊)等、いずれも未収録。
(四)「雑誌等掲載文献」については、本「文献」でも収録されたものがやはり多い。その一例として、上妻精編の「ニーチェ文献(日本)」と比較されることを進めてもよいが、この機会にさらに戦後まもない時期のもので、これらがいずれからも収録の洩れているものを列記してみると、次のものがある。阿部六郎「トルストイとニーチェにおける善の思想——ヒューマニティの運命」(昭和21年7月『思索』二号)。唐木須三「ニーチェとの対決」(昭和21年7月『知と行』一卷七号)。水上英広「ニーチェと近代精神」(昭和21年11月『人間』一卷一号)。H・デューモリン「時代と信仰——ニーチェとドストエフスキイ序説」(昭和21年11月『カトリック思想』二六卷一〇号)未見。水上英広「能動的ニヒリズムの問題」(昭和22年5月・未詳)。水上英広「ニーチェとキリスト教的人間」(昭和23年3月『基督教文化』未見)。国松孝二「ニーチェと古典文献学」(昭和23年12月・『小牧健夫博士還暦記念論文集 文芸論攷』生活社刊)。

(五)その他、気づいたことを書き留めておくと、本「文献」では昭和の初めから、戦後になるまでの期間の「雑誌掲載文献」が全然収録されていないという奇妙なことになっているが、これは野上巖編に収録のものゝ転載と、編者自身の手による作成である戦後文献との中間時代に当る期間が全然調べられていないことを意味するものだろう。また次の点に誤りがある。阿部六郎著『神の影像』⑤の発行所「六壮社」は、「壮文社」。国松孝二「愛

と憎しみ——ニーチェと文献学」⑤は、「愛と憎しみ——「ニーチェと古典文献学」の一章」が正しい。「和辻哲郎著『ニーチェ研究』筑摩書房(改版)」と記されているものは、正確には、和辻哲郎『ニーチェ研究』(上・下)△筑摩選書7、8▽ (昭和23年11月、12月・筑摩書房刊)で、「訂正版」と現本には記されている。その他、本「文献」には三笠書店より「世界文学選書」中に六冊刊行されている『学生版ニーチェ全集』⑤の収録が洩れている。

ニーチェの著作 参考文献

藤田美実編(昭和27年10月)

△内容▽本「著作・参考文献」は、単行書『フリードリッヒ・ニーチェ——その人間と思想』の巻末に付されたもので、「ニーチェの著作」「参考文献(a伝記、b思想研究)」に分類され、外国文献と邦語文献とを同時に収録されたもの。収録の内容は、単行書の主要文献のみに限られている。

△覚書▽先に原田義人編「日本におけるニーチェ文献」が刊行されている以上、収録内容については、敢えて問題にするには及ばない。新たに収録のものは、『シエストフ選集第一巻』⑦所収の「トルストイとニーチェの教義に於ける善」(中山省三郎訳)と、K・レ・ヴェット著『ヘーゲルからニーチェへ』⑧の二点だけで、他は総て過去の「書誌」類に見当るものばかりである。また書誌的にも完璧なものではない。G・ブランデス著『ニーチェ人の哲学』の発行所は、本「文献」でも「近田書店」のままであるし、「伊福吉部隆」も「伊福部吉隆」と間違ったまま。他に、「阿部六郎」が「阿部六道」になっている間違いもある。

文献解題 Ⅲ ニーチェ

原 佑編(昭和33年1月)

〈内容〉「一、全集」、「二、主要著作」、「三、参考文献」に分けられ、内外の文献のうち主要なものだけを収録すると同時に、それぞれの文献についての簡単な解題に類する説明を付したもののうち邦語のものについては、「全集」三点、「主要著作」五点、「参考文献」二十五点、といずれも編者の任意選択によって主要なものだけを収録。また「解題」についても、「主要著作」の部門のものだけに、数行づつの説明が加えられている程度のもの。〈覚書〉「解題」とは記されているが、初心者向のための案内程度のもので、重要なものとはいえない。収録点類や範囲についても同じ。わずかに過去の「書誌」類に収録洩れの、G・ジンメル著、藤野涉訳『ショオペンハウエルとニーチェ』(岩波文庫)(昭和17年5月・岩波書店刊)が見当る程度。反面しかし、創元社版『ニーチェ選集』が、「未完・既刊八巻」などと記されていて、「全集」と「選集」とを混同しているような間違いが見当る。

研究書目・参考文献(ニーチェ)

国松孝二編(昭和35年2月)

〈内容〉本「研究書目・参考文献」は、先に刊行の原田義人編「日本におけるニーチェ文献」から、「作品翻訳」の部分を除いたのと、昭和二十五年以後の分を多少増補した程度で、他はほとんどそのまま転載されたもの。増補の対象となっているのは、「単行書研究文献」十点、「雑誌論文類」二点。

〈覚書〉問題となるのは増補の部分だけであるが、戦後の新しい年代の資料が増補されている程度のもので、ことさら書誌的に問

題とするほどのものではない。のみならず増補の対象外の部分については、原田義人編「日本におけるニーチェ文献」のところで指摘した事柄が、大半そのままあてはまる。ここではG・ブランデス著『ニーチェ超人の哲学』の発行所が、依然「近田書店」のまま訂正されずにあることだけを記しておく。なお増補された部分については、特に誤りは見当たらないが、「雑誌論文類」の増補がわずかに二点であるというのは、いかにもお粗末で手を抜いた感じが強い。われわれの調査では、総合雑誌、大学関係の紀要類だけに発表された論文類だけに限ってみても、この期間、昭和二十七年は九点、二十八年は九点、二十九年は四点、三十年は十一点、三十一年は七点、三十二年は七点の論稿が見当る。⑤ 結論として、本「研究書目・参考文献」は、やはり『世界文学大系42 ニーチェ』の読者のための案内に編纂されたものと考えるのが至当だろう。

四

以上、われわれはこれまでニーチェに関する「書誌」類のうち、年度の比較的古いもの八点について、年代順にある程度の詳細な検討と評価を加えて来たわけであるが、残された資料については、この調子では些か重複が過ぎると懸念されるので、ここでは以後の作業として具体例を上妻精編の「ニーチェ文献」と、拙稿の「ニーチェ研究の文献目録と解題(邦文単行書篇)」の二点にのみ絞って検討を加えるだけにとどめたい。というのも、残されている「書誌」類、八点の内容を要約してみると、次のような関係にあることが迎れるからだ。すなわち、信太正三編「ニーチェ研究のための文献」

は、同編者の手になる『実存主義』二十五号所収の「ニーチェ文献（日本）」のダイジェスト版。上妻精編の「ニーチェ文献（日本）」は、同編者の先に『実存主義』二十六号の特集号、「実存主義の回顧と展望」に所収の「文献 二、ニーチェ」を、のち「ほぼそのまま」理想社版『ニーチェ全集別巻』に転載されたもので、いずれも収録内容は信太三編「ニーチェ文献（日本）」を全面的に基礎としての改訂増補。また「文献案内」は、『世界の名著46 ニーチェ』の「附録I」に掲載の案内に過ぎないので、出典は判然としな

五

みを加えておくことにする。

ニーチェ文献（日本）
上妻精編（昭和38年5月）

いが過去の「書誌」類から主要なものだけを抄録した程度のもので、内容は問題とするに足りないもの。さらに拙稿の「ニーチェ研究の文献目録と解題（邦文単行書篇）」も、基礎的には野上巖編のもの、信太三編の両「文献」を参考として作成した程度のもので、八点のうちいずれからも独立しているのは、わずかに拙稿の「日本におけるニーチェの移入史」と、「ニーチェに関する新聞・雑誌文献と翻訳書目」のみ。それゆえ残された課題として、現段階における「ニーチェ書誌」類についての評価・検討の問題は、上妻精編の「ニーチェ文献（日本）」と、拙稿の新しく作成したもの二点にのみ限って論を進めればおよそことは足りるわけであるが、相にく拙稿の「日本におけるニーチェの移入史」の方は、現段階では未完成であることから、ここでは以下の作業として結論的に、上妻精編の「ニーチェ文献（日本）」と、拙稿の「ニーチェ研究の文献目録と解題（邦文単行書篇）」の二点にのみ絞って評価・検討を加えることでこの稿を結ぶこととお許し願いたい。そしてなお最後に、拙稿の新しく作成した「ニーチェに関する新聞・雑誌文献と翻訳書目」については、評価は読者に委ねるとして、二、三の補遺、補訂の

「ニーチェ文献（日本）」は先に説明したごとく、『実存主義』二十五号所収の信太三編「ニーチェ文献（日本）」に「改訂を加え」と記されているもので、初出は『実存主義』二十六号所収の「文献 二、ニーチェ」に当るが、それを「ほぼそのまま」理想社版『ニーチェ全集別巻』に転載されたもの。特徴としては、以前の「書誌」類に比較して文献の収録点数が全部門に亘って多しと多いこと、年代の新しいものが全般にかなり増補されていること、特に戦後の雑誌文献に限っては紀要類を中心に大巾な増補が見られることなどがあげられるだろう。収録の点数は、「a、著作」I、単行書 一六一点（うち「全集」類九点）。「b、紹介・研究」I、単行書 八三点、II、雑誌論文その他 一七八点。△覚書▽過去のニーチェに関する「書誌」類の中では、収録範囲、収録点数の両面にわたって総決算ともいふべき性格を持つ。それだけに既刊のものに見られた共通の間違い、問題点、それに個々の「書誌」類に存在する「調査不足による誤り」等が、そのままでかなり集積しているといった面での欠陥も数多く存在するので、余計に注意を要する。その病根としてここでは編者自身による現本調査の不足を指摘しておくのが何より必要であるが、一応このことを実証するために過去の「書誌」類から受けついでいる共通の間違いを拾い出してみると――

野上巖編の両「年表」からのものとして、「文明批評家として文
学者——本邦文壇の側面評」は、依然「側面観」のまま。『悲劇
の出生、善悪の彼岸』も、依然「発生」のまま。「山口小太郎講
述」^⑧ ^{対訳}ツアラトウストラ如是説 第一編』も、「山口小太郎訳」
ツアラトウストラ如是説「のまま。阿倍能成訳『この人を見』^⑩
の発行年月も、「大正二年十一月」が「十二月」のまま。『ニ
超人の哲学』の発行所も、「近田書店」のまま。「ニーチェのツ
アラトウストラ解釈並びに批評」の掲載年月も、「大正七年一月」
のまま。『^{ニーチェ}識られざる神』も、「^{ニーチェ}識られざる神」(ニ
ーチェ詩集)「のまま。

原田義人編からのものとして、三浦白水(抄)訳『ニーチェの人
格及哲学』^⑪も、依然「三浦吉兵衛」のまま。『若きニーチェ』
『孤独なニーチェ』の両発行所も、「新太陽社」のまま。伊福
吉部隆も「伊福部吉隆」のまま。『ニーチェ詩集』の発行日も、
「昭和十六年一月」のまま。『神の影像』の発行所も、「六社社
」のまま。「愛と憎しみ——ニーチェと古典文献学」の一章
も、「愛と憎しみ——ニーチェと文献学」のまま。

信太三編からのものとして、野中正夫訳『ギリシア人の世界』
^⑫の「昭和十八年十一月」は「十月」。阿部六郎訳『ギリシ
ア悲劇時代の哲学』(古賀書店、昭和19・2)となっているもの
は、正確な書名表記は『悲劇時代の希臘哲学』で、「昭和十九年
三月」刊行。「長谷川天溪「美的生活論とニーチェ」帝国文学、
明34・9」となっているのは完全な誤りで、本論稿の筆者は登張
竹風(信一郎)、しかも発表当時は無署名。以上、詳細にわたる
ことは省略して、一応気のついた範囲内で現本調査のおろそかに

されていることを指摘してみたが、次いでさらに本「文献」の編
者自身がおかしている間違い、誤植等を指摘しておけばはこの
程度で致命的な弱点が取り除かれると思われるので、列記してお
くことにする。「登張竹風「ニーチェの影響」文学界 明35・6
」のうち、「文学界」は「文芸界」、「明35・6」は「明治三十
五年三月」。陶山務著「ツアラトウストラ読本」の「昭13」は、
「昭和十二年十月」。「前川助夫「ニーチェ哲学の本質」」のう
ち「前川助夫」は「前川勘夫」。また「昭8・2」は、「昭和七
年十月」。「ハインリヒ・デュモリン「ニーチェの宗教性とキリ
スト教」(『近代思想と基督教』社会思想研究会のうち)」と記
されているものうち、「社会思想研究会」は「エンデルレ書店
」とすべきだろう。^⑬「国松孝二「愛と憎しみ——ニーチェと文
献学」」^⑭のところで、「惇信堂『念論文豊田博士還暦記集』
」と記されているのは、「豊田博士還暦記念文学論文集」。「国
松孝二「ニーチェ・ルネッサンス」おんどり通信、6巻11号」と
記されているのは、「ニーチェ・ルネッサンス」「雄鶏通信」「六
十一号」。「川原栄峰「ニーチェの生涯」」は、「川崎芳隆「ニ
ーチェの生涯」」。「今井仙一「ニーチェの政治思想」同志社社
会学」のうち、「同志社社会学」は「同志社法学」。「赤坂三男
「ニーチェの社会主義理念に就いて」と記されているのは、「
赤坂三男「ニーチェにおける民主意識とその政治的構造」。「
陽に翔け昇る——妹と私」(ニーチェ遺稿)ニーチェ遺作刊行会
訳 四季社」と記されているのは、「「ニーチェ遺稿 陽に翔け
昇る——妹と私」十菱麟訳、ニーチェ遺作刊行会刊」が正しい。

次に視点を變えて、本「文献」を「書誌」として見た場合における問題を改めて列記してみると、ここでもこれまでのものと同様の諸点が問題になるだろう。

(一)「単行書」研究文献の収録範囲が、以前のもの同様に曖昧であり、この点についての新たな配慮がなされていない。例。繰り返すことになるので説明を簡略にするが、例えば、阿部次郎著『地獄の征服』⁶⁶や、同著者の『世界文化と日本文化』⁶⁷等が新しく収録されているのに対し、他の単行書の一部に収録の重要な文献が未収録であるのは、理由があまり判然としない。私見を述べれば、『文芸評論』地獄の征服』に所収の、「ダンテの「神曲」とニイチェの「ツアラストラ」」などより、当時において重要な意味を持ったニイチェ文献は、逐一列記するまでもなく、かなり存在するはずである。⁶⁸

(二)「雑誌論文その他」についても同様、収録範囲の規準に曖昧さが目立つ。例。明治時代のものが特に目立つので取りあげてみると、「美的生活論とニイチェ」⁶⁹、「ニイチェ主義と美的生活」⁶⁹、「帝國文学記者に与へて再びニイチェを論ずるの書」⁷⁰、「馬骨人言を難ず」⁷¹、「馬骨先生に答ふ」⁷²等、『美的生活論争』『馬骨人言論争』関係の文献が収録されているのに対し、同様の論争の発端となった坪内逍遙の「馬骨人言」⁷³、登張信一郎の「解嘲」⁷⁴等が洩れている。またニイチェ自体について論じられた多くの論稿も見当らない。例えば重要なものでは、中島徳藏「ニイチェ対トルストイ主義」(明治34年6月)『西倫理會論理講演集』七)、伊達源一郎「ニイチェの思想」(明治36年1月『独立評論』一)、桑木敬賢「ニイチェの「ツアラストラ

」如是説を読む」(明治36年2月)『西倫理會論理講演集』十一)、守屋源次郎「文章家としてのニイチェ」(明治36年12月)『37年1月』『学燈』七年十二月)『八年一)、和辻哲郎「シヨウに及ぼしたるニイチェの影響」(明治43年2月)『帝國文学』十六卷二号)、沢木梢「ニイチェの超人と回帰説」(明治43年8月、10月)『三田文学』一卷四号、六号)、片上伸「デイオニソスとアポロ」(明治44年12月)『文章世界』六卷十六号)、などあるがいずれも未収録。このことは収録の規準の問題より、調査不足が原因していると考えらるべきだろうか。

(三)このことに関連して、本「文献」においてもなお「雑誌論文その他」の部分では、洩れている重要な論稿が多すぎる。逐一列記すると量が多すぎるので、例としてここでは昭和の初期から十九年までの重要なものに限って列記することにする。⁷⁵

藪田香敷「近代独逸思想と仏教」(昭和5年11月、6年3月、12月)『眞実学報』一、三、二卷一)、久保虎賀寿「ヘーゲルの弁証法とツアラストラの永恒回帰」(昭和7年6月)『竜谷論叢』三〇二号)、藤原定「若いニイチェの出版」(昭和8年1月)『リベルテ』三、藤原定「幼時のニイチェ」(昭和8年2月)『リベルテ』四、萩原朔太郎「ニイチェに就いての雑感——種々なる覚え書」(昭和9年10月)『浪漫古典』一卷七輯)、芳賀檀「ニイチェ、決意と火」(昭和9年12月)『独逸文学研究』未見)、三木清「ニイチェと現代思想」(昭和10年4月)『経済往来』一〇卷四号)、小松清「行動主義とニイチェ」(昭和10年6月)『経済往来』一〇卷六号)、小口優「ニイチェと独逸文芸学」(昭和10年6月)『三期』『早稲田文学』二卷六号)、谷川徹三「ニ

「チェ」(昭和10年6月『経済往来』一〇巻六号)、高冲陽造「ニ
 イチエ及びベルグソンの思惟と近代思想」(昭和10年7月『世界
 文化』一年六号)、神保光太郎「狂へるニーチェ」(昭和10年7
 月『日本浪漫派』一卷五号)、江口渙「ベルグソンとニイチエ」
 「(昭和10年7月『行動』三年七号)、高冲陽造「ニイチエと現
 代文学」(昭和10年8月『経済往来』一〇巻八号)、加藤信也「
 ニイチエとパーテル・ガスト」(昭和10年9月『三田文学』一〇
 巻九号)、生田長江「ニイチエとトルストイとの対照」(昭和10
 年12月『日本評論』一〇巻一二号)、生田長江「ニイチエの著作
 と其劇的傾向」(昭和11年2月『日本評論』一一巻二号)、得能
 文「ニーチェの七傾向」(昭和11年5月『丁西倫理会倫理講演集
 』四〇三号)、馬場久治「ニイチエと高山樗牛」(昭和11年11月
 『コギト』五四号)、馬場久治「ニイチエと音楽」(ニイチエ・ワ
 グナー・ビゼーのカルメン)」(昭和12年1月『コギト』五六号
)、馬場久治「ゲーテとニイチエ」(昭和12年6月『コギト』六
 一号)、馬場久治「ニイチエと萩原朔太郎」(昭和12年9月『コ
 ギト』六四号)、今井仙一「ニイチエに於けるソクラテスの問題
 」(昭和13年1月・同志社大学『哲学年報』一輯)、馬場久治「
 ニイチエと伊太利」(昭和13年2月『四季』三四号)、馬場久治
 「伊太利に於けるニイチエ」(昭和13年5月『四季』三六号)、
 秋山英夫「ヘラクレイトスとニーチェ」(昭和13年11月・東京帝
 国大学『独逸文学』二年三輯)、ヤンコ・ラヴリン、寺岡峰夫訳
 「ニイチエ(一)(二)——ニイチエと近代意識」(昭和15年2月、
 3月『批評』四号、五号)、佐藤通夫「『超人』の事行論的解釈
 」(昭和15年7月・九州大学『文学研究』二七輯)、芳賀檀「ニ

イチエの君臨」(昭和15年10月11日『報知新聞』未見)、土井虎
 賀寿「ゲーテとニイチエを結ぶもの」(昭和18年3月『中央公論
 』六六七号)、堀健三「絶望と超克——キェルケゴールの人間と
 ニイチエの人間」(昭和18年10月・神戸大学『六甲台論叢』三三号)。
 (四)「単行書」の「研究・紹介」「著作・訳書」の部分におい
 ても、なお次のものが未収録。△研究・紹介▽伊福吉部隆著『ニ
 イチエ愛と知慧の書』(昭和11年11月・教材社刊)。K・レヴィ
 ット著、柴田治三郎訳『ヘーゲルからニーチェへI、II』△岩波
 現代叢書▽(昭和27年4月、28年6月・岩波書店刊)。L・シェ
 ストフ著、中山省三郎訳『トルストイとニイチエ——教義におけ
 る善』⑦(昭和27年9月・創元社刊)。△著作・訳書▽安倍能成
 訳『この人を見よ』△岩波文庫▽(昭和3年10月・岩波書店刊)。
 永瀬平一訳『善悪の彼岸』△現代思想全書2▽(昭和14年3月・
 三笠書房刊)。登張竹風訳『如是説法ツアラトウストラ』(上・
 下巻)。(昭和21年10月、22年5月・山本書店刊)。生田長江訳
 『悲劇の出生』(昭和22年・赤坂書店)未見。生田長江訳『季節
 はずれの考察』(昭和23年5月・赤坂書店刊)。登張竹風訳『ツ
 アラトウストラ』(昭和25年8月・羽田書店刊)。
 (五)「研究・紹介」においては、さらに「改訂版」の収録に統
 一を欠く。例。「改訂版」として収録されているものには、土井
 虎賀寿著『ツアラトウストラ』羞恥・同情・運命』⑦(昭和
 23年6月・評論社刊)、和辻哲郎著『ニイチエ研究(上・下)』
 ⑧(筑摩選書7、8)▽(昭和23年11月、12月・筑摩書房刊)、立
 沢剛著『ニイチエツアラトウストラ』⑨△大思想文庫26▽(昭和23
 年8月・岩波書店刊)、その他が見当るのに、次の「改訂版」は

いづれも収録されていない。阿部次郎著『文芸評論地獄の征服』(昭和8年12月・岩波書店刊)。同著『世界文化と日本文化』(昭和24年12月・角川書店刊)。和辻哲郎著『ニーチェ研究』(昭和17年12月・筑摩書房刊)、登張信一郎著『如是経序品』(昭和18年3月・山本書店刊)等。さらに翻訳の研究文献にいたれば、D・アレヴィ著、野上巖訳『ニーチェ伝(上・中・下巻)』⑧△改造文庫▽(昭和13年2月、17年8月・改造社刊)、S・ツヴァイク著、秋山英夫訳『魔神との戦い——ニーチェ』△角川文庫▽(昭和33年2月・角川書店刊)等の「新訳」なり「改訳改訂版」の収録がなされているのに、次のものは未収録。L・シェストフ著、木寺黎二・小西孝作共訳『悲劇の哲学』△現代思想家全書3▽(昭和14年7月・三笠書房刊)。E・ポーター著、加藤信也訳『ニーチェ研究』(昭和12年4月・荻原屋文館)、L・ギース著、榎山四郎・川原栄峰共訳『ニーチェ——実存主義と力への意志』(昭和33年8月・パンセ書院刊)。肝心なことは、収録されているものと、除外されているものとの限界がはっきりと示され、統一されることにあるだろう。

(六) 次の点において、書誌的な厳密さに欠ける。まず「ニーチェ」が総て「ニーチェ」に統一されていたり、阿部次郎著『ツアラストラ・解釈・批評』が「ツアラストラ・批評と解釈」となっていたりして、「書名表記」の正確さに欠ける。次いで個々の例をあげるなら、阿部次郎著『文芸評論世界文化と日本文化』所収の「『悲劇の誕生』——その体験及び論理」の初出は、大西克礼編『大塚博士遺曆記念 美学及芸術史研究』(昭和6年1月・岩波書店刊)である。したがって本「文献」に『世界文化と日本

文化』のみしか収録されていないのは理解に苦しむ。また伊福吉部隆著『ニーチェ 人生哲学』の内容は、厳密には同著者の『ニーチェ愛と知慧の書』(昭和11年11月・教材社刊)と同一のものであり、ただ本書は書名と装幀のみが異っているもの。しかも刊行年が接近していることから、疑問に思い調査をなしてみると、その後、奇妙な発見をした。本書は『ニーチェ愛と知慧の書』の「改訂版」でありながら、内容自体については全然活字が改められておらず、第二刷を翌十二年六月に書名と装幀のみ変えて刊行されたとか考えられないもの。さらに奇妙なことは、本書は「奥付」では教材社発行となっているのに、「箱」では「成光館蔵版」と記されている。しかもさらに調査を進めると、本書の昭和十三年三月刊の「再版」では、「箱」「奥付」とともに「成光館」と記され、装幀を変えて刊行、さらに昭和十四年五月の「第四版」では、装幀は再び本書と同一のものとなり、「奥付」のみ「河野成光館」となっている。このことから判断してみると、本書には余程複雑な遍歴がまつわるものと想像し得るが、詳細は未詳。いづれにしろここでは、本書は「ニーチェ愛と知慧の書」の「改訂二刷」か「改訂版」にしか当たらないものであるから、本「文献」に本書のみが唐突に収録されてあるのには問題があるといえ得る。また同様に近いことは、秋山英夫著『ニーチェ論——デオニユソスと超人』⑨△理想叢書▽(昭和25年8月・理想社刊)と、同著者の『デオニユソスと超人——ニーチェ研究序説』⑩△理想叢書▽(昭和23年10月・理想社刊)との関係についてもいえる。前書と後書とは同一内容のもので、ただ前書では「序」のみ書き加えられたもの。しかも「奥付」を見ると、『ニーチェ

論——デイオニュソスと超人』の方には「二刷」と記され、この本の初版発行日が昭和二十三年十月、つまり『デイオニュソスと超人——ニーチェ研究序説』の発行日と同じ日付になっている。

このことから判断すると、前書は後書の「改訂二刷」としか考えることが出来ないが、本「文献」では何のことわりもない。さらに竹山道雄訳『ツアラトストラウかく語りき(上・中・下)』⁸³⁾に至ると、本「文献」では「(弘文堂世界文庫) 昭16・2、昭18・2、昭18・10)」とのみ記されていて、同じ弘文堂刊の「世界文庫」でも、「新書版」の大ききものと「文庫版」のものとの二種類が、それぞれ刊行年度を異にして発行されているはずなのに両方の発行年月を混同したままで記されている。⁸⁴⁾ その他、西谷啓治の「ニーチェのツアラトストラウとマイスター・エックハルト」の所収が、『根源的主体性の哲学』(昭和15年10月・弘文堂書房刊)のみあげられているが、本論稿の初出は、石原謙編『哲学及び宗教と其歴史——波多野精一先生献呈論文集』(昭和13年9月・岩波書店刊)である。後は繰り返せば、本「文献」においても「副題」「叢書名」の洩れているものが全般にかなりあることを付記すれば、ことは足りるだろう。

ニーチェ研究の文献目録と解題(邦文単行書篇)

高松敏男(昭和42年3月)

△内容▽本「目録と解題」は、昭和五年以前の分は、生田長江・野上巖編「日本に於けるニーチェ文献年表」を、それ以後昭和三十六年までの分については、信太正三編「ニーチェ文献(日本)」をそれぞれ全面的に基礎にし、これに一部訂正増補して作成したものである。特色としては、全篇に文献の写真と、内容等についての

「解題」に類するものが付されていることをあげることが出来るが、書誌的な意味では従来のものより勝っているわけではない。収録点数は全部で一七七点、増補は昭和三十七年以後の分を中心になされているが、全篇に誤りもかなり多いし、「解題」についても資料内容の紹介程度の役割しか果たしていない。

△覚書▽まず「解題」の誤りから指摘すれば、E・F・ニーチェ著、磯部泰治訳『妹の見たるニーチェ』(大正5年6月・新潮社刊)のところで、原著の完訳が「昭和15年、モダン日本社刊」ニーチェの生涯」と記されているのは、完全に間違い。この二つの訳書の原典に当るものは別々のもので、ニーチェの実妹の手になる伝記には二種類のものがある。⁸⁵⁾ またS・ツワイク著、神保光太郎訳『篤実への熱情——フリードリヒ・ニーチェ』(昭和14年9月・河出書房刊)のところで、「目次」として記されているものには、秋山英夫訳『魔神との戦い——ニーチェ』(八角川文庫▽昭和33年12月・角川書店刊)からのものとの混同がある。その他、探せば同種の間違いがなおいくつか見当るものと思うが、ここで問題としているのは書誌としての観点からのものであるので、視点を変えることにしたい。

最初に致命的な欠陥として、次の諸点が指摘できる。

(一) 文献の収録範囲が単行書研究文献のみ限られていることは問わないとしても、従来の「文献」で指摘したと同様、依然、収録範囲が統一されていない。

(二) 単行本の一部収録のもので、重要な意味を持つ文献の収録が依然かなり洩れていて、決定的な増補がなされていない。

(三) 「改訂版」「再版」「改訂増補版」等の収録が正確に整理

してなされておらず、かなりの混乱がある。

(四)「副題」「叢書名」等においても、従来のもの同様、洩れているものが見当る。

以上、具体例については、本「目録と解題」においても、過去のものから独立して作成されたものでない以上、すでに言い尽した事柄がそのまま重複する個所が多いので、ここでは省略することにして、以下「出版事項」等明らかに間違っている点だけを列記するに留めよう。但し「未見」と記されているものについては除外する。

登張竹風著『ニーチェと二詩人』からは、「竹」がぬけている。

『ニー超人の哲学』の発行所は「天啓堂」。斎藤竜太郎著『ニーチェ論攷』において、「『ニーチェ哲学の本質』の改版」とされているのは、正確には「『ニーチェ哲学の本質』の改訂増補」。

E・F・ニーチェ著『若きニーチェ』の発行所「河出書房」は、「モダン日本社」の誤り。W・シュレーゲル著『ニーチェの歴史哲学』の「昭和17年9月」は、「昭和17年8月」。和辻哲郎著『ニーチェ研究』（昭和17年12月・筑摩書房刊）において、「内田老鶴圃より刊行されたものの改版」と記されているのは、正確には「改訂第三版」。高坂正顕著『続実存主義』は、『続実存哲学』。

秋山英夫著『ゲーテとニーチェ』の出版社が「東大出版会」となっているのは、「大東出版」。高坂正顕著『キェルケゴールからサルトルまで』は、正確には『キェルケゴールからサルトルへ——実存哲学研究』。K・ヤスパース著『ニーチェ』（上・中・下巻）の発行年が「昭和25年4月」となっているのは、「昭和25年4月、7月、11月」。「和辻哲郎著『ニーチェ研究』（昭和25年

・筑摩書房刊）」は、正確には「『ニーチェ研究』（上・下）

昭和23年11月、12月・筑摩書房刊」。秋山英夫『ニヒルと神——キェルケゴールとニーチェ』（昭和26年10月）」は、「『ニヒルと神——キェルケゴールとニーチェ』（昭和26年7月）」。

K・レヴィット著『ヘーゲルからニーチェへ』のところで、「（昭和27年1月）」となっているのは、「昭和27年4月、28年6月」。

山口諭助著『悪と文学』の発行所が「理想社」となっているのは、「白鳳版、理想社発売」。S・ツヴァイク著、秋山英夫訳『魔神との戦い——ニーチェ』のところで、「河出書房より刊行されたものの、改訂改版」となっているのは、「新訳」。

ニーチェに関する新聞・雑誌文献と翻訳書目「についての補遺補訂」

第一部 ニーチェに関する新聞・雑誌文献」では、次のものが未収録。

「新刊 ブランデス、生田長江訳『ニーチェ超人の哲学』天啓堂」

「（大正4年2月・『生活と芸術』二巻六号）

「新刊 久津見蔵村『ニーチェ』丙午出版社」（大正3年6月・『生活と芸術』一卷九号）

「回顧」正宗白鳥（昭和10年5月11日『読売新聞』）

「ヘラクレイトスとニーチェ」秋山英夫（昭和13年11月・東京帝國大学『独逸文学』二年三輯）

「ハインリヒ・マンのニーチェ像——ニーチェ像をめぐって」白井竹次郎（昭和25年2月『思想』三〇八号）

「Books」ヘーゲルからニーチェへ」梅本克巳（昭和27年10月『近代文学』七巻一〇号）

「第二部 翻訳書目」では、次のものが未収録。

『この人を見よ』安倍能成訳（大正2年11月・南北社刊）

『ニーチェ箴言集』馬場久治訳（文化叢書）（昭和14年12月・青木書店刊）未見。

『ニーチェ詩集』阿部保訳（昭和16年2月・河出書房刊）

なおまた次の部分に誤りがあるので、訂正いたします。

「ツアラトウストラ」に関する断片「生田長治（明治44年10月『帝国文学』一七卷一〇号）のうち、「生田長治」は「生田長江」。「ニーチェに就いての雑感——種々なる覚え書」荻原朔太郎（昭和9年10月『浪漫古典』七輯）のうち、「七輯」は「一卷七輯」。「ニーチェ（一）（二）——ニーチェと近代意識」ヤンコ・ラヴリン、寺岡峰夫訳（昭和15年2月、3月『批評』五号、六号）のうち、「五号、六号」は「四号、五号」。「能動的ニヒリズムの問題」水上英広（昭和22年5月『思想』五号）となつていゝものうち、「『思想』五号」は間違いで未詳。「高山樗牛とニーチェ」杉田弘子（昭和41年7月『国語と国文学』四三卷五号）のうち、「『国語と国文学』四三卷五号」は「『比較文学研究』一—号」。

五

以上、われわれはこれまで日本におけるニーチェ移入史考察のための試論として、現在までに存在する「書誌」類に絞って検討を加えて来たわけであるが、結論としていえることは、すでにこれまでの考察で十分明らかなることと思う。現段階では信頼しうる完璧な書誌はまだどこにも存在しないのである。比較的まとまったものとし

ては、ようやく上妻精編の「ニーチェ文献（日本）」程度のものが見当たるとはいえ、まだ未収録の文献が多く、現本の調査が不完全なために、過去の不完全な「書誌」類が総合されたような結果に終り、移入史考察の基礎資料となすには決して満足いくものではない。

われわれの必要としているのは、余すことなく資料の発掘された正確で総合的な書誌であり、全体の完全な見取図とするに足りるものである。この課題に性急に答えるのは、容易なことではないだろう。

しかし一方、日本の近代というものを考える上で、ニーチェの与えた影響は多岐多彩であり、その根は深く、広範囲に及ぶとすると、それだけにニーチェの与えた影響は決定的なものであり、この課題はいつまでも放置し得るものではない。例えそれが明治以降開争的に、性急に繰り返されて来た一篇のニーチェの誤解史の遍歴を辿ることに終始しようと。なぜなら、日本の近代は、K・レーヴィットの言葉を借りるなら、それ自体一個の「生ける矛盾」なのだから、

注

- ① 『美的生活論争』ならびに『馬骨人言論争』。
- ② 大正二年十月、内田老鶴圓刊。

③ 桑木殿翼解説『チエ氏倫理説一班』／＼統倫理学書解説（明治35年8月・育成会刊）の「一 緒言」中に次の言葉が見当る。

「近來我國に於て、ニーチェの名が喧しく伝称せられるやうになりましたが、元來ニーチェの名は其の以前から聞えて居つたので、今から六七年前解説者は、帝国大学でケール教師が哲学史を講ぜられた時に、ニーチェの哲学といふのを講ぜられて、其の文章は巧妙であるけれども、其の説は極端な利己主義で、

- 排斥すべきものであると、いはれたのを記憶する。」
- ④ 八本篇▽の「Ⅲ 大正期における生命哲学の理解」のうち「二 ニーチェの理解」がある。
- ⑤ 本「文献年表」は、野上巖による単独のものとも考えられるが、原本には記載されていないので、ここでは「ニーチェ伝」の共訳者である生田長江の名をつけ加えた。
- ⑥ 「文献解題」中の「Ⅲ ニーチェ」の部分の執筆者は、茅野良男であるが、ここでは編者名をあげた。
- ⑦ 『世界文学大系月報28』の「研究書目・参考文献」ニーチェ▽には編者名が記されていないので、ここでは『世界文学大系42 ニーチェ』の編者名をあげた。
- ⑧ 『附録1』中の「文献案内」には編者名が記されていないので、『世界の名著46 ニーチェ』の編者名をあげた。
- ⑨ 本論稿の内容は書誌。連載の第一回として、明治期のみ掲載。注⑤参照。
- ⑩ 大正四年一月刊、生田長江訳、近代思潮叢書第一編。
- ⑪ 大正四年二月、早稲田大学出版部、現代哲学第三篇。
- ⑫ 明治三十四年一月、『太陽』七巻一号。
- ⑬ 「思潮」、未見。のち大正八年四月に新潮社より単行本として刊行。
- ⑭ 大正七年一月に『中央公論』に発表したもので、ニーチェをモデルにした中篇小説「嵐の前」所収。
- ⑮ 本書中に、大正三年一月、『中央公論』掲載の「フリードリッヒ・ニーチェ」、ならびに大正三年三月、『中央公論』掲載の「超人の福音」の二論稿所収。後年、*La vie de Frédéric*

- Nietzsche, Calmann-Lévy, 1909* からの抄訳という指摘が本稿にはある。
- ⑰ ニーチェの思想に覚醒される主人公の登場する長篇小説。
- ⑱ 「近代学芸叢書第二編」の文字は、本書では「表紙」「扉」「奥付」等に記されていない。「箱」は未見であるが、岩波書店版『和辻哲郎全集第一巻』巻末の金子武蔵氏「解題」によると、叢書名の記されていたことが述べられているし、また大阪府立図書館の目録カードにも叢書名の記載があることから、「箱」に記されていたと十分考えられる。
- ⑲ 大正五年七月、精華書院刊。
- ⑳ 大正三年四月、丙午出版社刊。
- ㉑ 文芸叢書。「美的生活論とニーチェ」「解嘲」「馬骨人言を難す」「馬骨先生に答ふ」「ニーチェの影響」等の論稿が所収。
- ㉒ 「馬骨人言」「帝国文学記者に与へて再びニーチェを論ずるの書」等の論稿が所収。
- ㉓ 「ニーチェ主義と美的生活」「新思潮とは何ぞや」等の論稿が所収。
- ㉔ 「フリードリッヒ・ニーチェ論」として「グロットフス氏のニーチェ論」がある。
- ㉕ 「ニーチェのザラツストラを論ず」が所収。
- ㉖ 「夢の道士の研究」と題したニーチェ論がある。
- ㉗ 「ショーペンハワーとニーチェ——厭世観の問題」がある。
- ㉘ 中島力造「ニーチェ晩年の哲学思想」が所収。
- ㉙ 「新文明の予言者——フリードリッヒ・ニーチェ」が所収。
- ㉚ 全篇「超人」の問題を論究したもので、第一章第四節▽に

は「ツアラトゥストラ如是説」がある。

⑧1 「ダンテの「神曲」とニーチェの「ツアラトゥストラ」」が所収。

⑧2 中西伊之助「ニーチェ」が、第十講に見当る。

⑧3 以下いずれも本文では、著者、書名、版年が簡単に記されているだけである。

⑧4 のち、書物展望社編『書祭』（人）（書物展望第百号記念文献資料集）（昭和十五年五月・書物展望社刊）に収録。

⑧5 昭和十七年八月・改造社刊、改造文庫のうち。

⑧6 全十二冊。昭和十年四月より昭和十一年九月まで日本評論社より刊行完結。

⑧7 本書は同著者の『ニーチェ 人生哲学』（昭和十二年六月・教材社刊）の初版に当るもの。詳細はのち本文に説明があるので省略。

⑧8 『ニーチェの生涯』（上巻）。昭和十五年四月刊。浅井真男・小口優・山崎八郎・森偽郎・野中正夫共訳。本書は「表紙」では『若き日のニーチェ』となっている。

⑧9 『ニーチェの生涯』（下巻）。昭和十五年七月刊。同訳者。

④0 「新太陽社」は「モダン日本社」がのち社名を変えた後身。

④1 昭和十二年六月、教材社刊。

④2 第一書房刊。

④3 阿部保訳。河出書房刊。

④4 昭和十九年十月、愛宕書房刊。

④5 昭和十八年十一月、新太陽社刊。

④6 本「選集」は、最初全八巻のもとに企画されたが、刊行が確認し得たのは、一巻、二巻、四巻、八巻の四冊のみである。

④7 本「全集」は、昭和二十七年八月現在においては一巻、二巻、三巻、四巻、七巻、八巻、九巻の七冊が刊行されていただけにとどまる。そして企画では全十冊の予定であったが、第六巻は未刊に終わっている。

④8 本「全集」は角川文庫として刊行のものの帯に「ニーチェ全集」と銘をうって、全二十三冊の予定で刊行を企画されたと記憶するが、昭和二十七年八月までに刊行されたのは八冊、のち四冊が刊行されただけにとどまる。

④9 百花文庫十七。「ヘーゲルの弁証法とニーチェの永劫回帰」が所収。本論稿の初出は「ヘーゲルの弁証法とツアラトゥストラの永劫回帰」久保虎賀寿、で昭和七年六月『竜谷論叢』に。のち『触覚的世界像の成立——ニーチェ』（昭和十四年三月・河出書房刊）に所収のものの再録。本「文献」には「文庫名」が洩れている。

⑤0 「第三章 超獣から超人へ——ニーチェ」、第四章 ニヒリストの日記——ニーチェ」がある。本「文献」では副題が洩れている。

⑤1 アテネ新書1。「第三章 最初の完全なるニヒリスト（ニーチェ）」「第四章 肯定的ニヒリズム（ニーチェ・続き）」がある。

⑤2 アテネ文庫。「第一章 ニーチェに於ける歴史的事実」のうち「第一節 ニヒリスト・ニーチェ」「第二節 永劫回帰と超人」がある。

⑤③ 筑摩選書九。「ヨーロッパのニヒリズム」と「ルソーよりニ
ーチェに至る市民社会の問題」の二論稿がある。

⑤④ 昭和二十二年十二月刊。阿部六郎文芸論集。

⑤⑤ 昭和二十一年十二月、淳信堂刊。『豊田博士還暦記念文学論
文集』所収。

⑤⑥ 本「全集」は「帯」にのみ「学生版ニーチェ全集」の文字が
記されている。

⑤⑦ 昭和九年十二月、改造社刊。

⑤⑧ 柴田治三郎訳。昭和二十七年四月、岩波書店刊。岩波現代叢
書。

⑤⑨ この点については、拙稿「ニーチェに関する新聞・雑誌文献
と翻訳書目」（昭和45年3月『大阪府立図書館紀要』第六号）
参照。

⑥① 南北社刊。

⑥② P・メエビウス著。大正二年九月、警醒社書店刊。このこと
については、完全な間違いとはいえないので、先の部分で敢え
て列記するのをさしひかえたが、ここでついでに補足して置く
と、「三浦吉兵衛」ではやはり問題が残る。書名表記の「号」
を無視して、「奥付」本名を取るなら、他の資料においても統
一すべきである。

⑥③ 筑摩書房刊。

⑥④ H・デュモリ著『近代思想と基督教』には、のち社会思想研
究会出版部より『近代思想とキリスト教』なる書名の本が、昭
和二十八年九月、現代教養文庫の一冊として刊行されているが、
本書は『近代思想と基督教』と『マルキシズムと実存主義の間

』の二書でとりあつた主要な部分のみを集録しただけのも
ので、「ニーチェの宗教性とキリスト教」なる論稿は省略され
ている。本「文献」では両者を混同しているのではないか。

⑥④ 正しくは「愛と憎しみ——ニーチェと古典文学」の一章」
であることは、先に記した。

⑥⑤ 但し、以上列記したことのうちには、日本学術会議第一部『
文科系文献目録XVI——倫理学篇』1964中の誤りと一部重複
する部分が存在していることを指摘しておきたい。

⑥⑥ 大正十一年十月、岩波書店刊。文芸評論第一輯。

⑥⑦ 昭和九年四月、岩波書店刊。文芸評論第二輯。

⑥⑧ この点について、説明を省略したので少し補足しておく
と、「ダンテの「神曲」とニーチェの「ツアラッストラ」では、
ダンテが中心的に論じられ、ニーチェについては結末で少しし
か触れられていないのに対し、未収録の中沢臨川著『破壊と建
設』などに所収の二論稿は、大正三年一月と三月に『中央公論』
誌上に発表されると、文壇で大きな反響を呼んでいる。

⑥⑨ 長谷川天渓。明治三十四年十月二十一日、二十八日『読売新
聞』。「文献」では「読売 明34・10」とのみ記されている。

⑦① 馬骨人言の著者（坪内逍遙）。明治三十四年十二月十八日、
二十二日。『読売新聞』。「文献」では「帝国文学記者に与
えて再びニーチェを論ずるの書」読売 明34・11」とのみ記さ
れている。

⑦② 登張信一郎。明治三十四年十二月、『帝国文学』七巻十二号。

⑦③ 登張信一郎。明治三十五年二月、『帝国文学』八巻二号。「
文献」では「馬骨先生に答う」。

73 明治三十四年十月十三日～十一月七日、『読売新聞』。発表
当時は匿名。

74 明治三十四年十月、『帝国文学』七卷十号。

75 明治より現在までの詳細なものは、拙稿「ニーチェに関する
新聞・雑誌文献と翻訳書目」(昭和45年3月『大阪府立図書館
紀要』六号)を、本「文献」と比較して参照されたい。

76 本書の初訳は『シェストフ選集第一巻』(昭和9年12月・改
造社刊)所収の「トルストイとニーチェの教義に於ける善」。

77 「文献」では『ツアラトストラ、羞恥・同情・運命』。

78 「文献」では『ニーチェ研究』。叢書名が洩れている。

79 「文献」では『ニーチェ・ツアラトストラ』。

80 「文献」では『改訳・ニーチェ伝』となっている。

81 「文献」では『ニーチェ論』とのみ記されている。また叢書
名が洩れている。

82 「文献」では『ディオニソスと超人——ニーチェ研究序説』。
また叢書名が洩れている。

83 「文献」では『ツアラトストラ』とのみ記されている。

84 このことについては些か説明を必要とするが、要するに手元
の資料によると、版型が「文庫版」のものは、昭和十八年二月
に(上)、(中)、二冊が同時に刊行され、(下)は昭和十八年十
月。一方「新書版」の方は、(上)が昭和十六年二月。(中)
(下)については未詳。しかし、いずれであれこれだけの資料
から判断しても、「文献」の記載には混同がある。

85 Elisabeth Förster N.: Das Leben Fr. Nietzsches.

3 Bde Leipzig 1895-1904. 邦訳: 同: Der junge Niet-